

令和 2 年 5 月 24 日現在

機関番号：14301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K02566

研究課題名(和文) 19世紀のさまざまなニーベルンゲン作品と「ドイツ的なもの」の成立 正統性と虚構性

研究課題名(英文) Variable Nibelungen-Works in the Nineteenth Century und German Character -

研究代表者

奥田 敏広 (OKUDA, TOSHIHIRO)

京都大学・人間・環境学研究科・教授

研究者番号：60194495

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：ニーベルンゲン伝説に関してはワーグナーの『ニーベルングの指環』が有名であるが、18世紀後半の「ニーベルンゲン手稿」の発見以来、その後の19世紀には、ワーグナー以外にも実に多くのニーベルンゲン作品が作られていた。必ずしも注目されないまま伝承されてきた伝説が、突如「国民叙事詩」となったのである。

本研究では、そのような中で代表的なフケ、ヘッベルおよびガイベルのニーベルンゲン作品を取り上げて、それらの中に本当に「国民的」なもの、すなわち「ドイツ的なもの」が含まれているのか、またそうだとするならばその「ドイツ的なもの」のとはどのようなものなのを、当時のドイツの社会と政治を背景に明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

20世紀の後半以来のドイツにおいては、2度の大战の元凶になったナショナリズムへの反省から、ニーベルンゲン作品を「国民叙事詩」として取り上げることに警戒が強く、ワーグナー以外には研究があまり進んでいない。そのような状況の中で、ドイツ「国民」と「ドイツ的なもの」に容赦のない実証的な分析を試み、その「正統性と虚構性」を明らかにした本研究は、その視点と対象の独自性、およびその先入観のない公正性によりすぐれた学術的価値を有している。

グローバル化と多文化主義のせめぎあいは、現在世界が直面している最大の課題の一つであるが、本研究における「国民」の分析は、そのための一つの基本となる考察を提供している。

研究成果の概要(英文)：Indeed Wagner's "Der Ring des Nibelungen" is well known and studied in in-numerable volumes, but in fact many dramas and operas were written in the nineteenth century, since the manuscript of the legend was discovered. These works made the legend the "national Epos (Volksepos)" in those days. But since then until now they have been neither researched nor any attention paid to. I have taken the Nibelungendramas of Fouque, Hebbel and Geibel as subject of my research. My study have analyzed and showed clearly whether these dramas have "national character", namely "German national character" actually or not, and if they have it in fact, what peculiarity then it has, considering German society and politics at that time.

Variable Nibelungen-Works in the Nineteenth Century und German Character

研究分野：ドイツ文学

キーワード：ニーベルンゲン 中世伝説 近代市民社会

## 1. 研究開始当初の背景

およそ現在に至るまで圧倒的な反響と影響を与えてきた芸術家リヒャルト・ヴァーグナーの代表作である『ニーベルングの指環』(以後『指環』と表記、1867年)が、十九世紀ドイツ語圏を代表する劇作家フリードリヒ・ヘッベルのこれまた代表作『ニーベルンゲン族』(1862年)とほぼ同じ時期に成立し、しかもともに同じニーベルング伝説を素材にしていることは比較的良好に知られている。

しかし、1755年のヤーコプ・ヘルマン・オーペライト(周知のように、当初誤ってヨハン・ヤーコプ・ボードマーとされる)による「ニーベルンゲン手稿」の発見以来、ニーベルング伝説がいわばルネッサンスを迎えたというべく、それを素材にした実に多くの作品が、十九世紀において上記以外にも相次いで作られていたことはあまり知られていない。たとえば、近代における「最初」のニーベルンゲン作品であるフリードリヒ・ドゥ・ラ・モッテ・フケーの長編三部作『北方の英雄』(第一部『大蛇殺しのジークルト』1808年、第二部『ジークルトの復讐』1810年、第三部『アスラウガ』1810年)、フェルディナント・ヘルマンの『ニーベルンゲン』(1819年)、エルンスト・ラウパッハの『ニーベルングの宝』(1828年)、エマヌエル・ガイベルの『ブルンヒルト』(1857年)、ヴィルヘルム・ヨルダンの『ジークフリート伝説』(1868年)、ラインホルト・ジキギスムントの『ブルンヒルデ』(1874年)等である。(Vgl. Karl Rehorn: Die deutsche Sage von den Nibelungen in der deutschen Poesie. Frankfurt am Main 1877.)

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、上記の忘れられ無視されてきた作品を取り上げて焦点をあて、詳しく分析し検討することによって、従来あまりにもヴァーグナーに偏って研究されてきたニーベルンゲン伝説の十九世紀における受容を評価し直すこと、特にこの伝説が十九世紀において国民的伝説としての地位を確立する際にその核となった「ドイツ的なもの」の諸相を検討することにある。

たとえば「ドイツ的なもの」における苛酷で峻厳な「北方」の要素は、すでに『北方の英雄』を書いた十九世紀初頭のフケーと彼と交流のあったロマン派の人たちによってヴァーグナー以上に強調されていた。ヴァーグナーに偏ったニーベルンゲン伝説受容のこのような修正を、フケーも含めて他のさまざまなこの伝説を素材とした作品について検討するのが本研究である。それは、この伝説が十九世紀において国民的伝説としての地位を確立する際にその核となった「ドイツ的なもの」の諸相に、新たな側面を付け加えることになる野心的な試みであると言える。

このことが、非常に重要であり問題を孕んでいるのは、それ以来ニーベルンゲン伝説がドイツとドイツ人にとって何と云っても「国民叙事詩」として、その出自と本性、および歴史を象徴する存在となってきたからである。それはドイツの歴史と文学についての基本的大前提といっても過言ではない。しかし、そのような基本的大前提に疑問を投げかけるのが、本研究の目的である。つまり、それらの中に本当に「国民的」なもの、すなわち「ドイツ的なもの」が含まれているのか、またそうだとするならばその「ドイツ的なもの」のとはどのようなものなのを、当時のドイツの社会と政治を背景に明らかにしようとする試みる。

## 3. 研究の方法

具体的な手順としては、まず近代における「最初」のニーベルンゲン作品であるフリードリヒ・ドゥ・ラ・モッテ・フケーの長編三部作『北方の英雄』を、次にフリードリヒ・ヘッベルの『ニーベルンゲン族』を、そして最後にエマヌエル・ガイベルの『ブルンヒルト』を取る上げ、分析する。

フケーの作品の分析においては、単なる「細部の」類似の指摘に拘泥している従来の研究とは一線を画して、韻律などの形式や個々のモチーフにおいてのみならず、その中心となるテーマにおいてもフケー作品とヴァーグナーの『指環』は類似していると考え、両者の類似性が包括的で全体的なものであることを論証しようとする試みを行っているゲアハルト・シュミットの主張(「黙秘された出典テキスト(verstummt Quelle)」と題した論文)を検討する(Wolf Gerhard Schmidt: Der ungenannte Quellentext. Zur Wirkung von Fouqués *Held des Nordens* auf Wagners *Ring-Tetralogie*. Athenäum Heft 11. 2001)。シュミットによれば、ヴァーグナーとフケーの作品が似ているからこそ、ヴァーグナーはフケー作品に言及しなかったのであり、「意識的にテキストの相関性を無視する彼(ヴァーグナー)の戦略は、もっぱら独創性と先駆者性を示唆するという効果をもたらしている」と述べている。つまり、ヴァーグナーは彼の「独創性(Originarität)」に対する大いなる脅威として、意図的に関係を「沈黙」したというのである。この「独創性」に注目して、まず「ドイツ的なもの」の成立」の実相に迫りたい。

次に、ヘッベルがその素材を「国民叙事詩」と呼び、しかも自らの作品自身にも『ドイツ悲劇』という副題を付けていることに注目する。つまり、ここでヘッベルは、いったいどのような意味と意図から「国民」や「ドイツ」と作品を結び付けているのか、換言するなら、ヘッベルが「国民」や「ドイツ」をどのようなものとして考えていたのか、そしてまた、副題に掲げられた「あるドイツ悲劇」という言葉の内実について、『ニーベルンゲン族』という彼の最後の作品において考察したいと考える。

最後にガイベルのニーベルンゲン作品『ブルンヒルト』を取る上げ、分析する。十九世紀のほぼ同時代を生きたヴァーグナー（1813-1883）と、そのヴァーグナーが大いなるライバルとして意識せざるを得なかったガイベル（1815-1884）の評価は、周知のように、かれらの死後に世紀が変わり今日の二十一世紀に至るまでそれこそ天と地ほどの開きを見せている。すなわち、ヴァーグナーがバイロイト音楽祭などを通じてずっと注目の的であり、ジャーナリスティックなものから学術論文に至るまで、世界の至るところで問題にされ論じられてきたのに対して、ガイベルの方は、死後二十～三十年近くはかつての名声のいわば名残とも言うべき回想録のようなものもいくつか出版されているが、それ以降は専門家の間でもせいぜい文学史上の小事件としてしか扱われず、一般にはかれの名前を知る人は皆無という過言ではないであろう。

生前は高く評価されながらも、その後忘れられ無視されてきたガイベルのニーベルンゲン作品を掘り起こし分析することによって、その過小評価の原因を探り、その原因と「ドイツ的なもの」の関係を明らかにする。

#### 4. 研究成果

##### (1) ロマン主義的ナショナリズムとその変容（フケー）

グリムヒルドゥーアという副主人公のひとりに注目してフケーの三部作『北方の英雄』（1808年）を分析した結果明らかになったのは、それが、ワーグナーがハーゲンとアルベリヒの創造を通して創りだした『指環』四部作の世界とは、まったく違った世界であるということである。かたや、夢と現実、忘却と覚醒という二つの相が織り成す世界であり、かたや、あくなき富と権力の追及と官能的な愛の戦いが繰り広げられる世界である。それにしても、これら異質な二つの世界を作り出すもとになったのが、同じニーベルンゲンという素材であるのみならず、前半で見たように、実際に細部にまで及ぶ類似点まで持っていたこと、そしてさらにシュミットも言うように、当時始まりつつあった近代市民社会の功利的で俗物的な社会に対する批判として国民的な叙事詩を再創造するという共通の意図とメッセージさえ持っていたことなどを考えるなら、両者それぞれの独創性がさらに際立ったものに思われる。このことは、ワーグナーに偏りがちなニーベルンゲン伝承の受容研究に一石を投じるという意味で、重要なものである。

しかし、さらに私が強調したいのは、十九世紀のニーベルンゲン作品における「ドイツ的なもの」をテーマとする本研究において、ここで具体的に明らかにした状況の持つ意味である。つまり、なるほど、貴族であり軍人でもあったフケーは、台頭する近代の凡俗で陳腐な社会に反発して中世を賛美する貴族主義的思想の持ち主であり、それは確かに「英雄ジークルト」を描く上記作品にも確認することができる。しかしながら、一方においてフケーの描く「英雄」には、排他的で国粹主義的な要素は希薄であり、夢と魔法の支配する神秘主義的な要素が色濃く出ている。それは、反時代的、ないし超時代的な要素であり、そういう意味で、そこに「ドイツ的なもの」が感じられるとしたら、その「ドイツ的なもの」とは、復古的なものではなく、超現実的で創造的なものである。それ故に、それはまた、十九世紀を通じて強くなり、後のナチズムへと繋がるようなナショナリズムとは一線を画すものだと言わねばならない。

##### (2) 近代市民社会の成立とニーベルンゲン作品（ヘッベル）

ヘッベルの最後の作品であり代表作である『ニーベルンゲン族』を取り上げて分析したところ、そこで展開される世界は、一面において近代の原理たる合理性と自由、あくなき競争が徹頭徹尾支配する社会であることが分かった。にもかかわらず、ヘッベルはそこに、原初的な神話の世界を対置し、両者をあくまで戦わせようとしている。そしてその戦いの結果として、神話の敗北という「悲劇」を描き出さずにはいられなかった。つまり、『ニーベルンゲン族』という作品は、伝説を素材にしながら、歴史に対する他でもない神話の敗北を「ドイツ悲劇」として描く作品になっていることを、作品分析を通して明らかにした。

そしてさらに、このことの背景に、以下のような近代社会とドイツの政治的状況を私は読み込んだ。つまり、素材に対して結末を改変して権力移譲の場面を設け、また「三人の自由な者」のモチーフを付け加えることによって、作者ヘッベルが書き込もうとしたテーマに、同時代の政治状況とドイツ国民に対する彼の態度を読み取ることができると考えている。すなわち、近代の原理が同時代の社会を根本的かつ徹底的に変えて行くのを、ヘッベルはも

る手を挙げて歓迎していたわけではない。それは、作中の「重荷」に疲れ切り「嫌になった」と告白するエツェル王と同じである。ヘッベルは、自由の行く末に容赦ない競争社会やファシズムの危険もまた潜んでいることを、早くも見抜いていたからであろうし(まさにそれを彼はニーベルンゲン族の壮絶な争いとして描いている)、独善的な自由が事態を混乱させるだけで何の結実ももたらさないことを(三月革命の顛末を通じて)認識していたからであろう。そのような状況で三月革命の失敗の後、ドイツが君主国家として統一されようとしていたまさにその時期に、この作品が「あるドイツ悲劇」として創造されたのであった。

神話層の「巨人」であるディートリヒが、「自由な者」となり、そして「フン族の国」の後継者に指名されるのは、以上のような意味であると私は考える。そしてこのことが、いかに困難であり苦難に満ちているのみならず、おそらくは失敗するであろうことは、作品の最後でディートリヒが言う「十字架に架かって身罷りし者」という表現に明らかであろう。それは「悲劇」の最後に添えられた「融和」の言葉ではない。むしろ悲痛な覚悟であり、それ自体が「悲劇」を構成するものなのである。現実としての歴史に、あえて不可能な抵抗を試み抗う言葉だからである。そのような意味において、結末の部分は、非歴史的な「融和の神話」でもないし(Vgl. Saeko Ishikawa: Welten und Mythen in Friedrich Hebbels „Nibelungen“-Trilogie. In: Neue Beiträge zur Germanistik Bd.110, Japanische Gesellschaft für Germanistik, Tokyo 2002, S.240.) またツィーグラウ等の言うような「周縁」の飾りに過ぎない(Vgl. Klaus Ziegler: Mensch und Welt in der Tragödie F. Hebbels. Berlin 1938, S.157.) ものもない。

したがってまた『ニーベルンゲン族』という作品全体も、単純な神話への回帰を行う作品でもなければ、単なる近代批判の作品でもない。神話の必要性和意味をあくまで訴え表現しようとしつつ、「ドイツ的なもの」が近代では不可能になっていることを冷徹に認識して、かつそれを正確に描き出そうとした作品ということが出来る。そういう意味で、十九世紀においてニーベルンゲン作品が突然多く作られたのは、必ずしも「ドイツ的なもの」の再生を意味しているのではない。むしろ、その一つであるヘッベルの『ニーベルンゲン族』などを精密に分析するなら、その不可能と危険な虚構性を描いているものであることが分かったのである。

### (3) 近代市民社会の袋小路とニーベルンゲン作品(ガイベル)

十九世紀のさまざまなニーベルンゲン作品のひとつとしてガイベルの代表作である『ブルンヒルト』を詳しく分析してみた結果、そこで描かれているのが、中世伝説の単純な模倣でもなければ、かといってまた作者ガイベルの表面的な発言や意識的な政治的イデオロギーとも違い、十九世紀に広くヨーロッパ全体を席卷しつつあった近代初期の市民社会の特性であることが明らかになった。つまり、ガイベルは『ブルンヒルト』において、中世伝説を換骨奪胎して、競争に明け暮れ効率をひたすら追求する近代市民社会一般の様相をはからずも描いたのであり、それは「ドイツ的なもの」とはほとんど関係ないものであった。にもかかわらず、その素材と作者の説明だけによって、作品『ブルンヒルト』は「ドイツ的なもの」と安易に結びつけられてしまったのである。いわゆる「ドイツ的なもの」が、決定的な社会的影響を与えたにもかかわらず、いわば張り子の虎のように内実の乏しいものであったかを示す好例だと言わねばならない。

のみならず、『ブルンヒルト』においては、近代社会の負の側面そのものだけでなく、そのような負の側面を逆に拒絶する場合にもまた悲劇が待ち受けている、という状況も描かれることになる。それは、このドラマの主人公であるブルンヒルトジークフリートやクリームヒルト、グンター王などが、たとえそれによって痛みを受けるにもかかわらず、近代社会に適合し溶け込もうとしているのに対して、そもそもそのような近代社会を受け入れることができず、折に触れてはそこからのいわば脱出を試みずにはいられないという点である。作品の舞台となっている近代社会に、他の登場人物たちが多かれ少なかれ適合しているのに対して、ただひとりで真っ向から抵抗しているという点で、ブルンヒルトこそこのドラマのタイトルにふさわしい人物なのである。この近代を否定し拒否する場合にもけっして事態は好転しないという、そのいわば袋小路の状況を描いていることこそ、私がこの心理劇たるドラマをあまりにも近代的であると考えた所以に他ならない。

神話に色目を使いそれを取り込もうとしたワーグナーやヘッベルの作品が、利用し悪用されことも事実である。それらの作品に対して、まさに幸か不幸かガイベルのドラマは、神話に色目を使いそれを統合したり、魅力的な新たな神話を創造して新しい方向性を前衛的に示すこともなかった。ガイベルの作品が二十世紀においてほとんど忘れられ無視されたのはそのためであろう。しかし一方でガイベルは、神話的なものを持つ危険性を倦まず警告しながら、同時に近代社会の息苦しさや問題点を地道に描くことも止めなかった。このようないわば近代にどっぷりと浸かりきる姿勢は、その視野の狭さや魅力の欠如を感じさせる

かもしれない。それは近代の袋小路を抜け出す積極的な示唆に乏しいかもしれない。しかし、まさに近代に武骨に固着するその作品は、近代の加速度的追及とその反動としての神話の魅力に、そして両者の実りある融合の試みに何度も裏切られてきた現代の私たちにとってこそ、今新たに読み返し考えてみる必要と価値のあるものだと私は考えている。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 奥田敏広	4. 巻 63
2. 論文標題 近代国家と神話 - ヘッペルの『ニーベルンゲン族 あるドイツ悲劇』における「巨人」の戴冠をめぐる	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 京都大学人間・環境学研究科ドイツ語部会「ドイツ文学研究」	6. 最初と最後の頁 1-25
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 奥田敏広	4. 巻 18
2. 論文標題 ニーベルンゲン素材をめぐるワーグナーとフケー	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 Germanistik Kyoto	6. 最初と最後の頁 39-42
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 奥田敏広	4. 巻 65
2. 論文標題 エマヌエル・ガイベルの『ブルンヒルト』をめぐる - 近代市民社会における中世伝説の可能性	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 京都大学人間・環境学研究科ドイツ語部会「ドイツ文学研究」	6. 最初と最後の頁 65-96
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 Dieter Trauden	4. 巻 18
2. 論文標題 Originalitaet und Rezeption - Das Nibelungenlied und die Tradition der Nibelungensage -	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 Germanistik kyoto	6. 最初と最後の頁 47--50
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 奥田敏広
2. 発表標題 シンポジウム「Was ist eigentlich die Originalitaet?」における基調発表「ニーベルンゲン素材をめぐるワーグナーとフケー」
3. 学会等名 日本独文学会京都支部28年度秋季研究発表会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 Dieter Trauden
2. 発表標題 シンポジウム「Was ist eigentlich die Originalitaet?」における基調発表「Originalit&auml;t und Rezepti」
3. 学会等名 日本独文学会京都支部28年度秋季研究発表会
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>近代国家と神話 --ヘッベルの『ニーベルンゲン族 あるドイツ悲劇』における「巨人」の戴冠をめぐって  <a href="http://hdl.handle.net/2433/230218">http://hdl.handle.net/2433/230218</a></p>
---

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	Trauden Dieter  (TORAUDENN DITA)  (20535273)	京都大学・人間・環境学研究科・外国人教師    (14301)	